

洋12-128 (ショートコメント)

「96時間/リベンジ」 ★★★

2012 (平成24) 年11月26日鑑賞

<角川映画試写室>

監督：オリヴィエ・メガトン
製作・脚本：リュック・ベッソン
ブライアン・ミルズ/リアム・ニーソン
キム (ブライアンの娘) / マギー・グレイス
レノーア (ブライアンの元妻) / ファムケ・ヤンセン
サム/リーランド・オーサー
ケイシー/ジョン・グライス
バーニー/D. B. スウィーニー
ジェイミー/ルーク・グライムス
ムラド/ラデ・シェルベツァ
2012年・アメリカ映画・92分
配給/20世紀フォックス映画

◆ 12月16日を投票日とする衆議院議員総選挙を前に、日本では「第三勢力の結集」を軸とした政党の離合集散が顕著だ。また、これからのあるべき日本をめぐる経済はもとより安保、外交、社会保障、更には原発やTPP対応など「論点」は多い。しかし、愛する妻や娘を奪われたらどうするか？そんな質問に対する本作の主人公ブライアン・ミルズ (リアム・ニーソン) の答えは簡単。つまり、奪われた元妻や娘は犯人たちを殺してでも奪い返す、という単純なものだ。

もっとも、それが可能となるのは、前作『96時間』(08年)でもそうだった(『シネマルーム23』未掲載)ように、迷宮の街イスタンブールでも、元CIAの秘密工作員だったというブライアンの類まれなる身体能力と智力のおかげ。そう考えるとやはり、今回の総選挙では憲法改正や自衛隊に代わる国防軍の明記も必要・・・？

◆ 本作の主人公ブライアンが『007』シリーズのジェームズ・ボンドや『ボーン』シリーズのジェイソン・ボーンと大きく違うのは、第1に組織に属していないこと。そして第2に自分の頭によるオリジナルな思考・アイデア、そして冷静沈着な作戦立案能力に優れていることだ。もっとも、それは、ブライアンに息子や孫を殺されたことへの復讐に燃える今回の敵、ムラド (ラデ・シェルベツァ) たちがちょっと間抜けなことと平行だが・・・。

そんなブライアンの能力は、頭に麻袋をかぶせられて拉致されながらも冷静に時間をカウントし、車の進行方向や周囲の音などから自分の位置を分析したり、拘束されながらも隠し持っていた超小型携帯電話で娘キム (マギー・グレイス) に対して下す指示の仕方等を見ればよくわかる。前作でも本作でも、そんなブライアンの能力が十分に発揮されたのは、愛する娘や愛する元妻の誘拐が動機だったから、そんな設定のままでは本作をシリーズ化するのはムリだが、ブライアンのキャラクターは十分シリーズ化に適している。そう考えると、その「動機」の部分さえ少し工夫すれば、本作はシリーズ化も可能では・・・。

◆ 最近のアクション映画はカーチェイスに工夫を凝らしたものが多いが、リュック・ベッソンの製作・脚本となる本作ともなれば、それは当然。もっとも『007』シリーズの最新作『007 スカイフォール』(12年)でも当初のドライバーはジェームズ・ボンドの相棒の女性諜報員だったように、本作ではカーチェイスのドライバーが、まだ運転免許を取得していない愛娘キムというところがミソ。縦列駐車が苦手なキムだって、命を賭けたカーチェイスともなればクソ度胸で・・・。

また、本作ではブライアンの元妻レノーア (ファムケ・ヤンセン) は捕らえられ引き回されるだけの役柄だが、娘のキムは父親の指示に従って手榴弾を投げたり、屋根の上を疾走したりの大活劇を演じている。さすがに拳銃だけは使えないらしいが、11月24日に観た『ボディ・ハント』(12年)で、ジェニファー・ローレンス演ずるハイスクール生がいきなり拳銃をぶっ放すシーンに違和感を覚えた私としては、それくらいで妥当。本作にみるカーチェイス、そしてイスタンブールの街の中や屋根の上の疾走アクションを、『007』シリーズや『ボーン』シリーズのそれと比較してみるのも一興かも・・・。

◆ 娘キムをホテルに残したままムラドたちによって元妻レノーアと共に拉致され拘束されてしまったブライアンが、智力と体力の限りを尽くしていかにムラドから娘を守り、元妻を取り戻すか？それが本作のテーマだが、ブライアンは今遂に瀕死のレノーアを連れて逃げ回っていたムラドを追いつめた。ここで、ムラドの頭に一発銃弾を打ち込めばそれでジ・エンドだが、なぜかブライアンはそれを躊躇。そればかりか、「もし今後、反撃しないと誓うなら命は奪わない」と約束した。いぶかしそうに、なぜそんな行動に出るのかと問うムラドに対するブライアンの答えは・・・？

それは多分想定内のものだが、ムラドがYESと答えたら、ブライアンはホントに拳銃を置き、レノーアを連れてその場を立ち去るの？日本的「美学」からすればきっとそうだろうが、さて本作では？それはしっかりあなた自身の目で確認していただき、安全保障はどうあるべきかをしっかり考えた上で、12月16日の投票日に足を運んでもらいたいものだ。

2012 (平

成24) 年11月27日記